

X オロッコの家族と小屋

この写真は（図版XXI）「旧日本領樺太国境付近のオロッコの家族と小屋」である。

オロッコ人はアジアの古民族で今日ではシベリアの一部と樺太に住んでいる数少ないツングース系の一派である。彼らは満州語に類似のオロッコ語を使用し独自の伝統的な文化を今もお保持している。オロッコは自称「ウィタ」、露人は「オロチョン」、アイヌは「オロッコ」と呼び、和人も「オロッコ」と呼んで種族名となったものである。もともと大陸に根拠を持った種族で馴鹿^{トナカイ}を飼い水草を追って移動生活する遊牧民であり、性質はギリヤークより粗くして強く、風俗はだいたい大陸のツングースとかわったところはなく、衣類は毛皮魚皮を用い、木の皮を工作して生活用具を作り、また精巧な彫刻模様の技はアイヌよりも優れている。写真には馴鹿^{トナカイ}がみられないが、馴鹿と一緒に生活のため、ツンドラ地帯を離れることが出来ず、北緯50度以南の国境付近（敷香^{シスカ}）に止まったものであろう。カラフトの呼び名もこれらの種族名がおおいに影響しているのは北方研究者の発表でも明らかである。

樺太は海産物特に鮭や鱈が豊富で春秋にはこれらの魚で川が埋まる程であった。写真後方に見えるのは鱈の肉を干して冬期の食料として備えるための乾棚であり、昭和初期の写真で貴重な一葉である。

小屋はテント小屋で内部は柱なしの家で地面を浅く掘りおこして堅穴のごとし屋根は木の皮でふいた。和人のオガミ小屋に類似したものであると思われるが、移動する事を考えてのものか。
(納谷忠久)

附 記

最近縄文時代の住居を復元する試みが各地で行われている。しかし縄文時代の住居がそのままの形で残っていた例がなく、わからない点が多い。例えば屋根の材料に何を使ったのか、はたして茅ぶきなのか。今でこそ大木囲貝塚は茅の原になっているが縄文時代には茅を得るのは容易ではなかったのではないか、どうやって茅を刈ったのか……。

納谷氏の「オロッコの家族と小屋」は縄文時代の住居や生活を考える上で貴重な資料であり、特に寄稿していただいた。
(八巻正文)